

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

23 坂口安吾「文学のふるさと」

●参考 『定本 坂口安吾全集』【918/S11】（北野高校図書館）

■目標 自分の経験・思考をぎりぎりいっぱいまで伸ばして、読み取り、表現する

■安吾

坂口安吾（さかぐちあんご）（1906—1955）は、小説家。

太宰治と並ぶ無頼派ぶらいはいの代表格。

戦時中に書いた『日本文化私観』では、「法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺をとり壊して停車場をつくるがいい」と言い放ち、伝統の日本精神だのを掲げて戦争に邁進していた国家や世相へ痛烈なパンチを浴びせた。それが、言論統制の厳しい太平洋戦争下であったことに驚く。

そして、敗戦翌年の四月に『墮落論』。

戦争は終り、特攻隊の勇士はすでに閻屋となった。人間が変わったのではなく、ただ元の人間へ戻ってきただけである。幻影にすぎなかった天皇も人間になるところから真実の天皇の歴史が始まるのかもしれない。人間は墮落する。義士も聖女も墮落し、それを防ぐことはできず、また防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生きそして墮ち、そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。戦争に負けたから墮ちるのではない。人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけである。

「文学のふるさと」にも通じるモチーフが含まれている。なまなましい人間、現実になれることばは、ふしぎに読む者に力を与える。ぜひ、読んでみたまえ。——今、こういう書き手がほしいなあ。

（略歴参考—日本大百科全書より）

明治39年10月20日、新潟市生まれ。本名は柄五（へいご）。父仁一郎、母アサの五男。坂口家は旧家で大地主。放任主義の父、母にもなじめなかった安吾は、幼稚園、小学校、中学とはみだしが多く、まともに通学しなかった。「家」に反逆し孤立した彼を癒（いや）してくれたのは、故郷の海と空と風であった。1922年（大正11）県立新潟中学を退学して、東京の豊山（ぶざん）中学3年に編入学。中学卒業後代用教員となったが、26年東洋大学印度哲学科に入学。一念発起、寸暇を惜しんで哲学宗教書、梵語（ぼんご）、パーリ語、フランス語などを勉強し習得した。28年（昭和3）アテネ・フランセに入学し、長島萃（あつむ）などを知る。30年東洋大学卒業。同人誌『言葉』を創刊。31年、処女作『木枯の酒倉から』『ふるさとに寄する讃歌（さんか）』を発表。『風博士』（1931）を牧野信一が、『黒谷村』（1931）を島崎藤村（とうそん）、宇野浩二（こうじ）がそれぞれ激賞、さっそうと文壇に登場した。32年、新進美貌（びぼう）の女流作家矢田津世子（やだつせこ）と激しいプラトニック・ラブに陥って苦しみ、京都に転住。矢田との愛の清算は長編『吹雪（ふぶき）物語』（1938）となって結実した。38年帰京。太平洋戦争下に大胆破格な評論『日本文化私観』（1943）を発表。

- 1/13 -

戦後は混乱錯乱状況のなかで、人間の本质を洞察した『墮落論』（1946）を、その実践として『白痴』（1946）を発表した。これらの文学活動は、戦後の虚脱状態にあった日本人に一大衝撃を与えた。石川淳（じゅん）などといっしょに新戯作（げきさく）派ないし無頼派とよばれ、敗戦当初の文壇の旗手として脚光を浴びた。その後、一躍流行作家となり、1947年（昭和22）名作『桜の森の満開の下』を発表。梶（かじ）三千代と結婚、その反映が『青鬼の禪（ふんどし）を洗ふ女』（1947）となる。歴史小説『織田信長』（1948）、推理小説『連続殺人事件』（1947〜48）にも筆を染めたのもこのころである。49年、睡眠薬と覚せい剤による中毒症状が狂暴錯乱の行動をもたらした。50年、『安吾巷談（こうだん）』で世相を切り続け、国税庁や自転車振興会を相手に抗議文を書き注目を集めた。また『夜長姫と耳男』（1952）を発表したが、『狂人遺書』（1955）を残し脳出血により昭和30年2月17日急逝した。享年50。

■追跡

複数のテキストを読み比べさせるといふ試験が、最近の定番となっている。国の作る入試に多く取り入れられるようになったからだ。情報の読み比べ。それが時代の課題だから、とかいったことが、理屈づけになっているのかもしれない。

しかし、そんなこととは関係なく、いくつものテキストを串刺しにして、思考を展開させるところにしか、本来思考はない。何を今さら、の感あり。

この安吾のテキストは、それ自身の中にいくつかの別のテキストを配置している。各テキストの中に潜り、浮上し、再び潜ることを繰り返し、最後に上方から、波紋の消えた水面を見るような趣がある。——さて、安吾は何を見るか？

① シャルル・ペローの童話に『赤頭巾』という名高い話があります。すでにご存じとは思いますが、粗筋を申し上げますと、赤い頭巾をかぶっているのが赤頭巾と呼ばれていたかわいい少女が、いつものように森のお婆さんを訪ねていくと、狼がお婆さんに化けていて、赤頭巾をムシャムシャ食べてしまった、という話であります。まったく、ただ、それだけの話であります。

ペローの赤ずきんは、グリムより古い。1697年にフランスで出版された『ペロー童話集』の中の『赤ずきん』では、ほんとうにこのとおり、ここで話は終わり、猟師が狼の腹の中から赤ずきんとお婆さんを助け出すという話は、ない。

② 童話というものにはたいがい教訓、モラル、というものがあるものですが、この童話には、それがまったく欠けております。それで、その意味から、アモラルであるということとで、フランスでははなはだ有名な童話であり、そういう引例の場合に、しばしば引き合いにいられるので知られております。

インモラルが、反道徳の意味なのに対し、安吾の使っているアモラルは、なんの道徳性、教訓性もない、ただたんにない、ということの意味していることに注意。

③ 童話のみではありません。小説全体として見ても、いったい、モラルのない小説というのがあるでしょうか。小説家の立場としても、なにか、モラル、そういうものの意図がなくて、小説を書きつづける——そういうことがあり得ようとは、ちょっと、想像ができません。

読み手も、小説にモラルを読もうとする態度をもっている。『山月記』の李徴みたいに虎になったらダメだよな、人と交わり、努力しなくちゃ、とか思う。それはモラル(教訓)を読んでいることになる。

安吾のいうように、学校の道徳とは違う形だけれど、小説にもなんらかのモラル、目指す方向のようなものは含まれている。人間の切なさ、やりきれなさみたいなものをえがく小説でも、それを通じて、じゃあなたはどうか生きる？といった問いかけの残響を読み手の胸に残したりする。何か伝えたいこと——それなくして小説、また映画や演劇も、そういった表現行為が成り立つとは、普通思われない。

④ **ところが**、ここに、およそモラルというものがあって初めて成り立つような童話の中に、全然モラルのない作品が存在する。しかも三百年もひきつづいてその生命を持ち、多くの子供や多くの大人の心の中に生きています。——これは厳たる事実であります。

⑤ シャルル・ペローといえば『サンドリヨン』とか『青髯』とか『眠りの森の少女』というような名高い童話を残していますが、私はまったくそれらの代表作と同様に、『赤頭巾』を愛読しました。

「青髯」も妻を殺す金持ちの男の話で、猟奇的ではあるが……。まあ、最後に新妻は救われる。「サンドリヨン」はシンデレラ。

⑥ 否、むしろ、『サンドリヨン』とか『青髯』を童話の世界で愛したとすれば、私はないか大人の寒々とした心で『赤頭巾』のむごたらしい美しさを感じ、それに打たれたようでした。

「大人の寒々とした心で『赤頭巾』のむごたらしい美しさを感じ、それに打たれた」とはどういうことだろうか？ そう胸に止めておく。

「童話の世界で愛する」とは、教訓のある話として愛した、ということになる。しかし、赤ずきんは、救われない。どうしたって、赤ずきんは食われてしまう。しかし、そこに「美しさ」を感じたと安吾はいう。何か惹かれるもの、からだや心のどこかが、はっと微動す

るような波動を伝えるもの——そういう種類の「美」。

⑦ 愛くるしくて、心が優しく、すべて美德ばかりで悪さというものが何もない可憐な少女が、森のお婆さんの病氣を見舞いにいって、お婆さんに化けて寝ている狼にムシャムシャ食べられてしまう。

⑧ 私たちはいきなりそこで突き放されて、なにか約束が違ったような感じでとまどいしながら、しかし、思わず目を打たれて、ブツンとちょん切られたむなし余白に、非常に静かな、しかも透明な、ひとつの切ない「ふるさと」を見ないでしょうか。

⑨ その余白の中にくりひろげられ、**読解問題1**私の目にしみる風景は、可憐な少女がただ狼にムシャムシャ食べられているという残酷ないやらしいような風景ですが、しかし、それが私の心を打つ打ち方は、若干やりきれなくて切ないものではあるにしても、決して、不潔とか、不透明というものではありません。なにか、氷を抱きしめたような、切ない悲しさ、美しさ、であります。

読解問題1 「私の目にしみる風景」とは筆者のどのような思いを示しているか。

シンプルに作業をしてみよう。

この範囲から「私」の「思い」を示している(単語)を探す。(単語)(短い語句)に目をつけるのがコツ。むしろむしろ食べられたところからあと。

「むなし」「切ない」「残酷?」「やりきれない」「切ない」「悲しい」「美しい」。

三度繰り返される「切ない」に注目。⑧の終わりの「ひとつの切ない」「ふるさと」を見る」というのが、「私の見た風景」のことであるのは間違いない。

⑨段落では自分のいいたいことをそうではないものと対比しつつ、取り出そうとしている。

×残酷ないやらしいような風景(客観的にはそう)

△若干やりきれなくて切ない

×不潔とか、不透明

○氷を抱きしめたような、切ない悲しさ、美しさ

——愛らしい少女が食い殺される、という想像から、普通に感じるのは、残酷でいやらしく、血のにおいのする不潔で、恐ろしくどうしてそんなことに?といったわけのわからない不透明な感覚でしょう。しかし、私が見るのは、(感情的には、やりきれなさ、切ない悲しさが含まれるのですが)、**氷を抱きしめたような(冷たく、透明な(透き通ってよく見える))美しさ**なのです。——このように分析できる。ここが押さえになる。端的に言うなら、筆者は(残酷なはずの風景に)「美しさを感じている」というのが答えになる。

解答例 「残酷でいやらしい風景に、やりきれなさ、切ない悲しさを感じつつも、どこかで

その感情を越え、冷静な目で、よくそのありさまを見ることで、ある種の美しさを感じているということ。」

もちろん、現実の犯罪行為のようなものを直接見たときには、生理的な反応が先立ち、このような美を感じることはないだろう。しかし物語として描かれた世界を想像するとき、なんらかの美と呼びたくなるような風景がそこにあることに私たちは気づく。

——〈美〉が出現する秘密は、「物語は、終わる」ということに潜んでいるのではないか。本は閉じられ、映画は暗転しエンドロールが流れる。安吾のこのような美は、その「余白」に生まれてくる、何らかの真実なのである。

物語や映画は、現実とは違い、切り取られたカットとカットをつないだ世界だ。カットは突然切断され、別のカットにつながる。そのすきま、その余白に読む者見る者は何かを見る。余白にこそ何かを見るのだ。——「ミロのヴィーナス」を思い出した人もあるかもしれない。この本文の主旨とは違うけれど。

⑩ もう一つ、違った例を引きましよう。

⑪ これは「狂言」の一つですが、大名が太郎冠者たろうかじやを供につれて寺詣でをいたします。突然大名が寺の屋根の鬼瓦を見て泣きだしてしまふので、太郎冠者がその次第を尋ねますと、あの鬼瓦はいかにも自分の女房によく似ているので、見れば見るほど悲しい、と言って、ただ、泣くのです。

⑫ まったく、ただ、これだけの話なのです。「狂言」の中でも最も短いものの一つでしょう。



おにがわら。

⑬ これは童話ではありません。いったい狂言というものは、まじめな劇の中間にはさむ息ぬきの茶番のようなもので、観衆をワツと笑わせ、気分を新たにさせればそれでいいような役割のものではありますが、この狂言を見てワツと笑ってすませるか、どうか、もつとも、こんな尻切れトンボのような狂言を實際舞台でやれるかどうかは知りませんが、決して無邪気に笑うことはできないでしょう。

たしかにちよつと、リアクションに戸惑うな。笑いはするけど。

⑭ この狂言にもモラル——あるいはモラルに相応する笑いの意味の設定がありません。お寺詣でにきて鬼瓦を見て女房を思いだして泣きだす、という、なるほど確かに滑稽で、いちおう笑わざるを得ませんが、同時に、いきなり、突き放されずにもいられません。

⑮ 私は笑いながら、どうしてもおかしくなるじゃないか、いったい、どうすればいいのだ……という気持ちになり、鬼瓦を見て泣くというこの事実が、突き放されたあとの心のすべてのものをさらいとして、平凡だの当然だのというものを超躍した驚くべき厳しさで襲いかかってくることに、いわば読解問題2 観念の目を閉じるような気持ちになるのです。逃げるにも、逃げようがありません。それは、私たちがそれに気づいたときには、どうしても組みしかれずにはいられない性質のものであります。宿命などというものよりも、もつと重たい感じのする、のっぴきならぬものであります。これもまた、やっぱり我々の「ふるさと」でしょうか。

⑯ そこで私はこう思わずにはいられぬのです。つまり、モラルがない、とか、突き放す、ということ、それは文学として成り立たないように思われるけれども、我々の生きる道にはどうしてもそのようなでなければならぬ崖があって、そこでは、モラルがない、ということと自体がモラルなのだ、と。

読解問題2 「観念の目を閉じるような気持ち」とはどのような気持ちか。

「観念する」という語の意味から、端的に答えの見通しをつけよう。

「観念する」 Ⅱ 「あきらめて、状況を受け入れること。覚悟すること。例。もうこれまでと観念する」。ああ、もうダメだ、と目をつぶる表情ですね。答えとしては、それを書けばいいけれど、本文に添った形で材料を調べよう。

・(大名は泣いてるけれど、見ている者は) どうしてもおかしくなるじゃないか、いったい、どうすればいいのだ……という(突き放された) 気持ちになり、

・鬼瓦を見て泣くというこの事実が、突き放されたあとの(どうすればいいのだといった) 心のすべてのものをさらいとして、「平凡だの当然だのというもの(あれこれ評価するようなゆとり)を超躍した(を許さないような)驚くべき厳しさで襲いかかってくることに、いわば観念の目を閉じる(ああ、もうダメだという)ような気持ちになるのです。

・逃げるにも、逃げようがありません。

・それ(鬼瓦を見て泣くという事実)は、私たちがそれに気づいたときには、どうしても組みしかれずにはいられない性質のものであります。宿命などという(頭の中で考えたような)ものよりも、もつと重たい感じのする、のっぴきならぬ(退つ引きならない)避けることもしりぞくこともできず、動きがとれない)ものであります。

解答例1「鬼瓦を見て泣くという事実を見たときにわき起こる、その事実からどうしても逃げられないという気持ち。」

鬼瓦の例のところでは書けばこうなるが、「妻が鬼瓦に似ているといつて、大名ともある者が泣く」という話は、やはり笑い話ではあるので、「もつと重たい感じのする、のっぴきならぬものに襲われる」というのは、何か大仰な感じもする。

しかし、赤ずきんの例と鬼瓦の例は、同じ種類の思いをもたらす例として取り上げられていることに注意しよう。妻が鬼瓦に似ていることは、赤ずきんが狼に食われることと同様に、どうしようもない「悲劇」なのである。(だって泣いてるから)

解答例2「赤ずきんが狼に食われたり、妻が鬼瓦に似ていると大名が泣いたり、何の救いもなく物語が終わってしまったときにわき起こる、その事実からどうしても逃げられないことを認めさせられる気持ち。」

⑰ 晩年の芥川龍之介の話ですが、時々芥川の家へやってくる農民作家——この人は自身が本当の水呑百姓(土地を所有しない貧農)の生活をしている人なのですが、あるとき原稿を持ってきました。芥川が読んでみると、ある百姓が子供をもうけましたが、貧乏で、もし育てれば、親子共倒れの状態になるばかりなので、むしろ育てないことが皆のために自分のためにも幸福であろうという考えで、生まれた子供を殺して、石油缶だかに入れて埋めてしまうという話を書いてありました。

⑱ 芥川は話があまり暗くて、やりきれない気持ちになったのですが、彼の現実の生活からは割りだしてみようのない話ですし、いったい、こんなことが本当にあるのかね、と尋ねたのです。

⑲ すると、農民作家は、ぶっきらぼうに、それはおれがしたのだがね、と言ひ、芥川があまりのことにぼんやりしていると、あんたは、悪いことだと思ふかね、と重ねてぶっきらぼうに質問しました。

⑳ 芥川はその質問に返事することができませんでした。何事にまれ(にもあれ)言葉が用意されているような多才な彼が、返事ができなかつたということ、それは晩年の彼が初めて誠実な生き方と文学との歩調を合わせたことを物語るように思われます。

・ さて、農民作家はこの動かしがたい「事実」を残して、芥川の書斎から立ち去ったのですが、この客が立ち去ると、彼は突然突き放されたような気がしました。たった一人、置き残されてしまったような気がしたのです。彼はふと、二階へ上がり、なぜともなく門のほうを見たそうですが、もう、農民作家の姿は見えなくて、初夏の青葉がギラギラしていたばかりだという話であります。

・ この手記ともつかぬ原稿は芥川の死後に発見されたものです。

- 7/13 -

これまた、何の救いもない悲劇。事実。今度のは、本人を目の前に行っている分、先のふたつの例より生々しい。どうすればいい、といったことばが死んでしまう。何を言っても嘘くさい。そんな絶望的な事実を残したまま、物語は終了し、自分だけが「劇場」に取り残されている——そんな感じ。

・ ここに、芥川が突き放されたものは、やっぱり、モラルを超えたものであります。子を殺す話がモラルを超えているという意味ではありません。その話には全然重点を置く必要がないのです。女の話でも、童話でも、何を持ってきても構わぬでしょう。とにかく一つの話があつて、芥川の想像もできないような、事実でもあり、大地に根の下りた生活でもあつた。芥川は、その根の下りた生活に、突き放されたのでしよう。いわば、彼自身の生活が、根が下りていないためであつたかもしれませぬ。けれども、彼の生活に根が下りていないにしても、読解問題3根の下りた生活に突き放されたという事実自体はりっぱに根の下りた生活であります。

・ つまり、農民作家が突き放したのではなく、突き放されたという事柄のうちに芥川のすぐれた生活があつたのであります。

・ もし、作家というものが、芥川の場合のように突き放される生活を知らなければ、『赤頭巾』だの、さっきの狂言のようなものを創りだすことはできないでしょう。

読解問題3 「根の下りた生活に突き放されたという事実自体はりっぱに根の下りた生活」とはどのようなことか。

独特の言葉遣いに目くらしされないように分析しよう。「大地に根の下りた生活」とは？が問いになる。

「事実でもあり、大地に根の下りた生活でもあつた」を参考にすれば、「大地に根の下りた生活」とは、事実、そうしなければ生きていけないという、どうしようもない絶望的な事実である。単純に置き換えてみよう。

子を殺さなければ生きていけないという、どうしようもなく絶望的な事実、芥川が衝撃を受けて何も言えなくなつたという事実は、りっぱなことである。もし衝撃を受けなければ(作家として)生きていけない。

「もし衝撃を受けなければ」、事実を前にして、立ち止まり、突き放され、ことばを失うほどの衝撃を受けることがなかつたとしたら——逆に、立ち止まることもせず、目を背け、ごまかし、適当な、心にもない慰めを、何の抵抗もなくことばにするようなことがあつたとしたら——もつという、そのネタを何か、よそ者たちが「泣ける」物語に仕立ててやろうといった思惑にとられるような人間であるとしたら——芥川は「立派」でも何でも無い。そういうことになるだろう。

- 8/13 -

解答例「芥川が、子を殺さなければ生きていけないという、どうしようもなく絶望的な事実に対して、ごまかさず、正面からその衝撃を受けて何も言えなくなったという事実は、人間としての彼の誠実さを示しているということ。」

「どんなことにも言葉が用意されているような多才な彼」という言い方に、ある種の人間のタイプが示唆されている。こういう人間は今もいる。すぐに「解釈」し、「原因」を見つけ、「意見」を主張する。大きな声で。わかっただような顔で。

作家にもいる。器用に、ウケる作品を綴る技だけを養い、事実に向き合うことを避けようとする大衆の本能に合わせて、口当たりのよい（あるいは、刺激に満ちた、いろんな味の）薄っぺらい物語を量産する書き手。

「返事ができなかったということ、それは晩年の彼が初めて誠実な生き方と文学との歩調を合わせたことを物語る」という言い方は、それまでの芥川が、「地に根の下りない」 多才に溺れた文学を生産していたという批判にも聞こえる。

「そうしなければ生きていけない」と若き芥川は、「羅生門」の老婆に語らせていたが、安吾にいわせれば、そのときの芥川は、まだ観念のなかでそう書いていたに過ぎなかったのである。

・ モラルがないこと、突き放すこと、私はこれを文学の否定的な態度だとは思いません。むしろ、文学の建設的なもの、モラルとか社会性というようなのは、この「ふるさと」の上に立たなければならぬものだと思うものです。

主張が明らかになる。

「モラル（意味）とか社会性というようなのは、モラルがないこと、突き放すことの上に立たなければならぬ」。

私たちの社会は過剰な意味にあふれている。「こうすべきだ」という高い声が鳴り響いている。熱く声が渦巻いている。それらは、しかし、じつは、私たちの頭の中で渦巻いている幻想のバリエーションにすぎない。

かといって、正しいモラルや社会性が不可能であるというわけではない。文学が、確かな現実を建設しようとすることは間違っていない。しかし、その根には、事実——動かしたがたく、どうしようもなく、泣くしかなく、黙るしかない、生の事実というものが横たわっていないなければならない。

・ もう一つ、もうすこし分かりやすい例として、『伊勢物語』の一つの話を引きみましょう。

・ 昔、ある男が女に懸想してしきりに口説いてみるのですが、女がうんと言いません。ようやく三年目に、それではいっしょになってもいいと女が言うようになったので、男は飛びたつばかりに喜び、さっそく、駆け落ちすることになって二人は都を逃げだしたのです。芥の渡しという所をすぎて野原へかかったころには夜も更け、そのうえ雷が鳴り雨が降りだしました。男は女の手をひいて野原をいっさんに駆けだしたのですが、稲妻にてら

された草の葉の露を見て、女は手をひかれて走りながら、あれは何？ と尋ねました。しかし、男はあせって、返事をするひまありません。ようやく一軒の荒れ果てた家を見つけたので、飛びこんで、女を押し入れの中へ入れ、鬼が来たら一刺しにしてくれようと槍をもって押し入れの前がんにぶっつけたのですが、それにもかかわらず鬼が来て、押し入れの中の女を食べてしまったのです。あいにくそのとき、荒々しい雷が鳴りびびいたので、女の悲鳴もきこえなかったのです。夜が明けて、男は初めて女がすでに鬼に殺されてしまったことに気づいたのです。そこで、白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましものを——つまり、草の葉の露を見てあれは何と女がきいたとき、露だと答えて、いっしょに消えてしまえばよかった——という歌をよんで、泣いたという話です。

・ この物語には男が断腸の歌をよんで泣いたという感情の付加があって、読者は突き放された思いをせずにはすむのですが、しかし、これも、モラルを超えたところにある話のひとつではあります。

知っていますね。

・ この物語では、三年も口説いてやっと思いがかなったところでまんまと鬼にさらわれてしまうという対照の巧妙さや、暗夜の曠野を手をひいて走りながら、草の葉の露を見て女があれば何と大きくけれども男はいちずに走ろうとして返事すらもできない。——この美しい情景を持ってきて、男の悲嘆と結び合わせる緩とし、この物語を宝石の美しさにまで仕上げています。

・ つまり、女を思う男の情熱が激しければ激しいほど、女が鬼に食べられるというむごたらしさが生きるのだし、男と女の駆け落ちのさまが美しくせまるものであればあるほど、同様に、むごたらしさが生きるのであります。女が毒婦であったり、男の情熱がいいかげんなものであれば、このむごたらしさはあり得ません。また、草の葉の露をさしてあれは何と女がきくけれども男は返事のみすらもないという一挿話がなければ、この物語の値打ちの大半は消えるものと思われまます。

男の一途な恋情、そして、それに応えるように、背の上で男にことばをかける女。危機の中で、二人の心はいままさにふれあう。その絶頂で、女は消える。狼に食われた赤ずきんちゃんのように。

男は突き放され、座して、子どものように泣き暴れる。何の救いもなく、物語は終わる。

・ つまり、ただモラルがない、ただ突き放す、ということだけで簡単にこの凄然たる静かな美しさが生まれるものではないでしょう。ただモラルがない、突き放すというだけならば、我々は鬼や悪玉をのさばらせて、いくつの物語でも簡単に書くことができます。そういうものではありません。

では、「凄然たる（宝石の冷たさのような）静かな美しさ」はどのようにして生まれるのか。

・この三つの物語が私たちに伝えてくれる宝石の冷たさのようなものは、なにか、絶対の孤独——生存それ自体がはらんでいる絶対の孤独、そのようなものではないでしょうか。

「生存それ自体がはらんでいる絶対の孤独」とは？ 女は食われ、男は残る。子どもは埋められ、男は残る。赤ずきんは食われ、狼は残る。死と生。

私たちは、絶対的に、孤独のまま死ななければならぬ。誰かに見取られていたとしても、その死を代わることにはできない。心中したとしても、自分の死は自分だけの死である。そして、死は突然やってくる。

・この三つの物語には、どうにも、救いようがなく、慰めようがありません。鬼瓦を見て泣いている大名に、あなたの奥さんばかりじゃないのだからと言って慰めても、石を空中に浮かそうとしているようにむなしい努力にすぎないでしょうし、また、皆さんの奥さんが美人であるにしても、そのためにこの狂言が理解できないという性質のもでもありません。

・それならば、生存の孤独とか、我々のふるさとというものは、このようにむごたらしく、救いのないものでありましょうか。私は、いかにも、そのように、むごたらしく、救いのないものだと思います。この暗黒の孤独には、どうしても救いがない。我々の現身は、道に迷えば、救いの家を予期して歩くことができる。けれども、この孤独は、いつも曠野を迷うだけで、救いの家を予期すらもできない。そうして、最後に、読解問題4むごたらしいこと、救いがないということ、それだけが、唯一の救いなのであります。モラルがないということ自体が救いであり、ここに見ます。文学はここから始まる。——私は、そうも思います。

・アモラルな、この突き放した物語だけが文学だというのではありません。否、私はむしろ、このような物語を、それほど高く評価しません。なぜなら、ふるさとは我々のゆりかごではあるけれども、大人の仕事は、決してふるさとへ帰ることではないから……。

・だが、このふるさとの意識・自覚のないところに文学があるうとは思われない。文学のモラルも、その社会性も、このふるさとの上に生育したものでなければ、私は決して信用しない。そして、文学の批評も。私はそのように信じています。

読解問題4「むごたらしいこと、救いがないということ、それだけが、唯一の救い」だと

- 11/13 -

いえるのはなぜか。

たんに言い換えたり、まとめたりするだけでは答えられない。

「我々の現身は、道に迷えば、救いの家を予期して歩くことができる。けれども、この孤独は、いつも曠野を迷うだけで、救いの家を予期すらもできない」というところを手がかりに考えてみよう。

文字通り道に迷う。誰かに道を聞く。教えてくれるかもしれない。教えてもらえなくても、また誰かに会う可能性を期待して歩く。——人生の道、でもそうだ。どういう進路をとればいいだろう。迷う。やってみる。失敗する。助けてもらう。一つ乗り越える。また迷う。また乗り越える。私たちは、そのようにして、社会性の中で、方向（意味、可能性、モラル）を磁石に歩いている。絶望的になることもある。しかし希望の可能性もある。

通常のストーリーはそのようにできている。架空のストーリーもまた、現実の生を描くように、絶望や困難を描きつつも、モラル——進むべき方向を示唆する。

しかし、一方、意味もなく、孤として生まれ、もはや進むべき方向もないまま、孤として生を絶たれるという現実がある。というより、生はゼロ原点から、ゼロ原点への一軌跡にすぎない。意味を次々と人は求めるが、意味の劇場から離れ、暗黒の宇宙にぼつんと現れた生の観点から見ると、生の無意味さ＝救いのなさ是否定しようがない。逃れようがない、選択肢がない。

選択肢がないことが救いである。

そう置き換えたらどうか。

選択肢があつたのに、選ばなかった——そこに後悔が生まれる。選択肢が横たわる——そこに不安が生まれる。ほかの誰かと比べて、自分の選択に後悔と迷いが生まれる。救いは、次々に先送りされる。あるいは、何かの、誰かのせいにされる。

しかし、選択肢がない次元のことについて、もしそれを見つめるしかないことを知り、見つめたとしたら——安吾のいう冷たい美しさは、それを見つめる目に宿る光ではないか。ことばを停止させ、こうであるという事実をただ立ち止まって見つめること。ここはこうでしかない、ということとは、見方を変えれば、救い——一つの安定である。

安吾は刺激的に「むごたらしいことが救いだ」と読めるようにことばを配置しているが、むごたらしくあれ、といっているわけではない。救いがあるはずなのに、そうはならず、むごたらしい運命に落ちた、というのでは、救いがない。しかし、こうあるべきだというモラルの目（劇場を見る目）から見れば、むごたらしく見える事実も、例外なくこうではないという次元から見ると、そのむごたらしさが消えるのである。

解答例「生存の孤独とは、自分という現象が、結局は孤として現れ、孤として消えるという事実を指す。何かをしたらこの事実から逃れられるといった救いは、例外なく存在しない。その事実を、立ち止まって見つめることは、ある冷静な心の安定をもたらす可能性が

あるから。」

■ 読解問題

- 1 「私の目にしみる風景」とは筆者のどのような思いを示しているか。
- 2 「観念の目を閉じるような気持ち」とはどのような気持ちか。
- 3 「根の下りた生活に突き放された」という事実自体はりっぱに根の下りた生活」とはどのようなことか。
- 4 「むごたらしいこと、救いがないということ、それだけが、唯一の救い」だといえるのはなぜか。

■ 発展問題

ふつんと途切れて、突き放されたような気持ちがする小説や映画、漫画、演劇などの例を挙げ、本文の議論と比較して、論ぜよ。

● 重要語「モラル」 Ⅱ（精選版 日本国語大辞典）①道徳。倫理。行為の正邪とその区別に関する態度、また、広く人の生き方についての考え、精神的態度についてもいう。②物語、出来事、体験などの内的な意味。

安吾の使い方の中でも、②の「意味」という意味に置き換えるとわかりやすい文脈があった。